

めったに起きることはいないけれど、たまにでも起きると
えらいことになるのが、語りのさいちゅうにトイレに行きたくなることだ。
一度、三人でやっている公開シンポジウムを聞きに行ったとき、
途中でパネラーの一人がステージを下りて袖に消えたことがあった。

残りの二人はげげんな顔をしながら対話を続けた。
やがて三人目が戻ってきてディスカッションに加わり、予定通り
プログラムは終了した。

そうしたら、よせばいいのに想像が働かない司会者が「〇〇さん、一度
いなくなりましたが、具合でもお悪いのですか？」と尋ねた。
すると問われたパネラーは「すみません。手洗いに行きたくなりまして」
と、きまじめに答えたものだ。

もっとうまく言えば、豪快な笑いに転化できたと思うけれど、
恥ずかしそうに答えたので
客席の方に(こんなこと言わされて気の毒な…)という空気がただよってしまった。

さらに悪いことに、パネルディスカッションの内容よりも
パネラーが途中でトイレに行ったことの方が、
珍しいこととしてぼくの記憶に残ってしまった。

で、ものがたりライブの本番前、校長室で待機しつつ、15分前には手洗いを借りる。
たいてい職員室・校長室の近くに職員・来賓用トイレがある。

どうでもいいようだが、15分前と言うのが大事なところで、10分前になると
前の授業が終わって休み時間になり、廊下を生徒たちがうろうろしている。

その子たちに手洗いに行くところを見られたくない。

というのも、子どもたちは芸能人でもスポーツ選手でもなんでもない
ぼくのような者でさえ、スター扱いしたがる。

ただのストーリーテラーだから、冷静に考えれば
スターではないとわかるのに、学校にスターが来て実際に会えたら嬉しいから、
子どもたちは勝手にそういうことにして今日を迎えるのだ。
司書さんや先生たちも、ハレの日があった方が子どもたちが喜ぶとわかっているのに、
今日まで「さあ、明日は楽しいよー」とか盛り上げてきてくれたのだ。

それなら、その役割を受け持って堂々と演じるのが期待に応えるというものだ。
スターはトイレには行かない！

どこのホールでも一般の客と出演者のトイレが別なのはその夢を守るためだ。
というわけで、子どもたちが教室で前の時間の授業を受けている間に
トイレに行ってしまう。

ちなみに本番前には必ずトイレに行く。

ステージに立って語り始めれば、頭の中は話のことでいっぱいになり、
テンションも上がるから、トイレに行きたいと思ったことはない。

というか自分の体の内部のことなどまったく忘れてしまう。

だが、ものがたりがひとつ終わって一呼吸ついたときに
(あ、ちょっとトイレに行きたいかも)と思いだしたりするとまずい。
(自分はトイレに行きたいんだ)という変な暗示を自分にかけてしまうことになる。

実は一度、図書館で司書さんたちの研修会の講師をしているとき、
壇上でトイレに行きたくなったことがある。

しかも終了予定時間まではたっぷりあと 30 分以上しゃべらなければならなかった。
パネルディスカッションならパネラーが複数いるから、ちょっと抜けることもできるが
講演会ではそうはいかない。

まさか真剣に聞いてくれている参加者を前に「ちょっとトイレに」とは
美意識がじゃまして言えない。末代までの語り草にされてしまう。
だから我慢しながら話を続けているうちに冷や汗が出るわ、足にふるえがくるわ、
えらいことになってきた。

とうとう、あと 15 分というところで、あきらめて、こう言った。

「でも、子どもの本と図書館の関係について考えるとき、なにより大事なのは、
子ども自身が図書館の中を散歩するのって楽しいなという気分
なることです。そうなれば、子ども自身がいい本と出合う機会はすぐそこまで来ています。
そんな雰囲気は図書館側はどう作りだせるでしょうか。
あえて少し早めに終わることにします。

このあとはぜひ、みなさんがこの図書館の中を散歩してみてください」

いや、我ながらうまい！

で、頭をさげて、さっとひっこもうとしたら司会があわてて飛び出してきて

「まあまあ」とぼくを押し戻し、客に向かって

「まだ少し時間があるようです。

せっかくの機会ですから、どなたか質問がある方はどうぞ」などと言う。

首をしめてやりたいが、心で泣いて体も泣いて顔だけ笑ってつきあった。

このときは、ぼくを呼んでくれたスタッフのみなさんと控室で談笑していて
トイレに行きそこない、「時間です」と呼ばれてあわただしく出て行った結果だった。

以後、二度とこの失敗はない。

ついでに手洗いに行ったら必ず鏡を見て、えりが曲がっていないか、髪が乱れていないか、
鼻毛が出ていないか、などは見る。

以前、ズボンの片方だけ、すそが靴のベロにはさまった状態が出たことがあった。

ぼくは全然気づかなかったが、見ていた人から、あとで

「それが気になってしかたなかった」と言われた。

自分が、聞き手の集中を切らす原因になっては、そもそもなにをやっているのかわからな
い。

そもそもおしゃれではないし、舞台衣装も持っていないし、化粧ひとつ
するわけではないが、人前に入るわけだから、やはり最低限のチェックはする。

これはプロもアマも関係なく当然のところがけだろう。

具体的なアドバイスとして、錠剤でなく平べったいフィルムタイプの急性下痢止めの薬が売られている。

水がなくてもなめていけば溶けるもので、長時間のバス旅のときなどに役立つ。ぼくは語りをするとき、ズボンかシャツのポケットにこれを一包しのばせている。

実際にステージ上で使ったことはないから、みんなの前でどのようにうまくなめるか説明できないが、2、3秒後ろを向くだけですむだろう。

お守り代わりに持っている则安心する。

あと、ぼくはコンパクトも持っている。

コンパクトというのは女性の持ち物で、自分には無縁のものにずっと思っていた。だが、あるとき、会場で若い女性スタッフが意を決したようにぼくのそばに来て、「鼻毛の先にゴミがついてます」と小声で教えてくれたことがあった。

そんなことをいうのは勇気がいったろう。

ゴミとは早い話が鼻くそのことだ。

言わせて申し訳ないと思った。

そこでコンパクトを買った。

売り場で買うこと自体、ちょっと恥ずかしかったけれど、

これも若い女性店員さんは無表情で売ってくれた。